2017 9月 vol. 08
このまちのヒト・コト・モノをみんなにお知らせ！

萩まちだより

発行：萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社

近隣地域の経験に学ぶことも必要ですネ

大阪市立大学水内ゼミ・アイセック（大学委員会）のみなさんによるゲスト編集はまだまだ続きます。

地元の日本一シリーズ その⑤

1969年基本構想、1976年最初の地区の都市計画決定、1978年最初の事業計画決定…現在最終段階に

①日本最大規模で、半世紀という最も時間のかかったあべの再開発事業

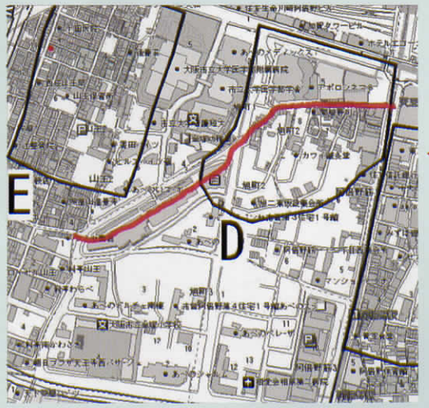
昭和30年代の阿倍野橋・旭町点描、雑誌『大大阪』より

この辺りは朝のラッシュがすむと不思議に田舎臭くなる。さらに日が落ちるとトタンに橋上にボ〇〇き、バ〇助がたむろし、いやに色っぽくなる。といってもここの色っぽさはホコリに包まれたザラザラした感じだ。パチンコ屋、飲み屋の並ぶ旭商店街のだらだら坂を降りると飛田遊郭に通じているが、表通りからちょっと横へそれるとこれまたいたるところに温泉マークがあるという次第（1956年：あの町この街・阿倍野区）

副都心的な性格をもちながらその発展がむずかしいのではないかということを感ずるのですが、何かこうつかみどころがない。公園や美術館、動物園といった施設があるかと思うと一方では病院や斎場といったものがある。またその背中合わせにスラムが存在するといったことで、つかみどころがないターミナルという感じがつよい。そういった点は東京の上野とよく似てるんですね。（1965年：明日の大阪<大阪再開発>・阿倍野ターミナル）

旭通懐古風景：右地図のD近辺の写真を集めてみた。どこかわかるだろうか。

1、2、5段目は2009年。それ以外は2005年撮影である。



2002年の地図で、かなり家の撤去が進んでいる、赤線は旭通、西半分は、あべのボンテ、マルシェの再開発ビル内の店舗街となった（下右写真）。

1956年の住宅地図で、旭通りを中心に店舗や家屋の密集している状況が読み取れる。東の入り口に、左上写真の道標があった。写真のように大正7（1918）年の建立であり、赤線にその下写真にみられるアーケードが伸びていた。

日本一の都市再開発ですっかり生まれ変わったあべの

今やあべのは大阪第3の商業集積地であるが、以前は戦前からの老朽した木造建築が多く残り環境上、防犯上問題を抱えた地域であった。そこで大阪市は1976年から長期間・大規模の都市開発を実施した。その過程では商店街店舗の全面移転や、木造建築の取り壊しが行われ、あべのの風景は約40年前とすっかり変わっている。

再開発地域から西方向西成区に向かうと、上町台地の崖と壁

再開発により大きく発展した阿倍野エリアと西成区は隣接している。その境界には約6～7mほどの崖と、「壁」（下写真）が存在する。天王寺駅からその壁に近づくにつれて活気がなくなっていく感がある。かっての賑わいを想像しながら、その雰囲気の変化を味わってみよう。

再開発には巨額のお金がかかったが、現在の姿をどう感じますか？

現在、あべのキューズモールのあるエリアはもともと住宅街だった。行政主導のもと多くの民家や商店が立ち退きを要請された。再開発の結果、大阪市は1961億円もの損害をだした。行政としては失敗かもしれない。住む人はすっかり変わり、ニュータウンのような趣に目的は達したと考えることもできる。立ち退きを迫られた商店も（左中写真群）一部当時の店構えを残し、別の場所で経営を続けている。

2017 11月 vol. 10
このまちのヒト・コト・モノをみんなにお知らせ！

萩まちだより

発行：萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社

大阪市立大学水内ゼミ・アイセック（大学委員会）のみなさんによるゲスト編集です。

地元の日本一シリーズ その⑥

日本有数の〇〇をいくつか有する、陰と陽を併せ持つ天王寺公園のレガシーを求めて

◇西洋式では有数の古さを誇る天王寺公園　◇有数の財閥、住友本邸の跡地
◇有数の古さを誇る天王寺動物園　◇有数の規模を誇る大阪市立美術館

↑ 1936年竣工時絵葉書の大阪市立美術館。大阪市大の時計台本館と同じ設計者、伊藤正文らによる、町家の土蔵風の帝冠建築といった、異色の建築物。商都、住友家の反映か。いずれにしても名建築である。大阪市立図書館デジタルアーカイブより

← 書院造の住友茶臼山本邸と、神戸に移築後の空地とその右に広がる慶沢園（昭和初期撮影）→

左写真は、江戸時代から住友家の別荘のあった茶臼山に1915年に建築された本邸。洋館も建築された。当地には10年間のみで、1925年に神戸市住吉に移築。日建設計サイトより。

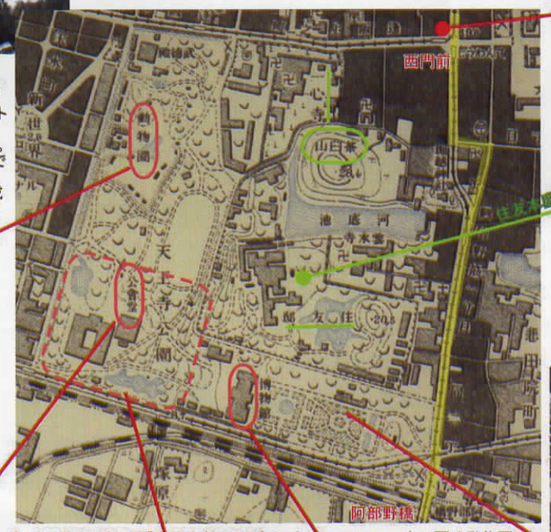
その跡地が白く見える右写真では、純日本風の池泉回遊式庭園がよくわかる。1926年に、大阪市に寄贈。上田貞治郎写真アーカイブより。

←建設中の大阪市立美術館、1929年。住友本邸跡地に建設中だが、1927年に着工して完成まで10年かかっている。左上に野外音楽堂が見える。大阪市立図書館デジタルアーカイブより。

←↓ 1936年頃の動物園。モダンな造りのエントランスと、芸達者なりタ嬢たち。1915年に日本で3番目として開園。電気局作成の『大大阪観光より』、1936年

↓ 野外音楽堂は、昭和の初めから1980年までであった。ステージは、戦前のドイツ風の雰囲気があったといわれる。1960年代関西フォークの歴史のサイトより

↓ 天王寺公会堂は、1936年まで使用されたとのことで、個人的には、労働運動や、米騒動、水平社の集会などでよく登場したことを思い出す。昭和初期に撮られた。下記写真建物は、内国勧業博覧会のものの再利用である。上田貞治郎写真アーカイブより。



↑ 1万分の1地形図「大阪南部」1921年では、リアルに天王寺公園や動物園、住友邸が読み取れる。1909年に博覧会跡地の東側に、西洋式公園として開園。個人的には、熊野街道を走る市電が、まだ阪堺電軌所有で、西門前で線路が切れているところに目が行ってしまった。

↑1806年、江戸末期の茶臼山付近。国立国会図書館デジタルアーカイブより

←↑↓ 3つの地図内黄色線は、熊野街道

→1908年の2万分の1地形図「大阪東南部」より。

↑ 1925年に開催された大大阪記念博覧会。一つ上の地図の赤点線の敷地。サラセン風のエキゾチックな展示館が並んでいたといわれる。『大大阪記念博覧会誌』1925年、大阪毎日新聞

市民博物館、1903年の内国勧業博覧会の美術館を転用して1917年に開館、大阪市立図書館デジタルアーカイブより

因みに天王寺公園を会場とした博覧会は、上記の1925年博覧会に加えて、1913年の明治記念拓殖博覧会、1928年の大礼奉祝交通電気博覧会、戦後1952年の講和記念婦人とこども大博覧会、そして1987年の天王寺博覧会となる。戦後の天王寺公園の陰と陽については続編とする。

出典:『萩まちだより』14号(2018年)

江戸＆明治期の紀州街道(現在の釜ヶ崎銀座通りのある道)にタイムトリップだ

新今宮界わいの原型を眺めてみよう

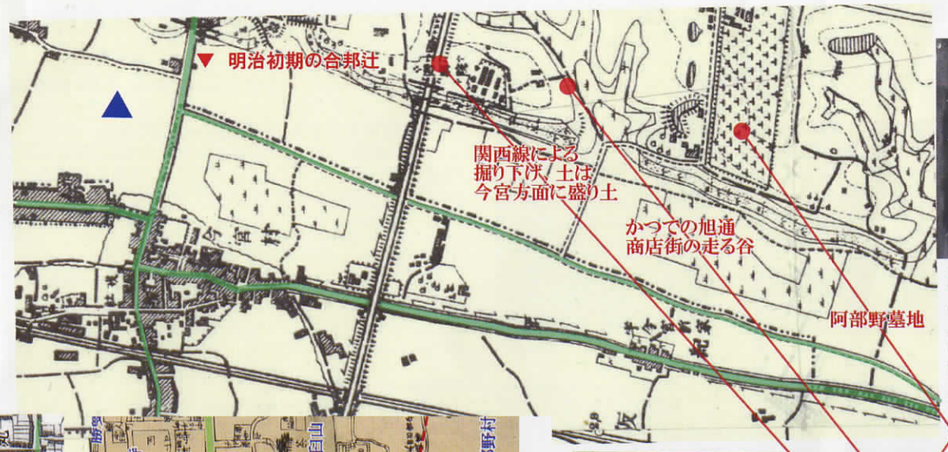
あっしゃぁ、
時間を旅するカラスさ

のどかな田園風景だから
みなさんもひばりの気分になってね

水内俊雄
大阪市立大学
都市研究プラザ教授

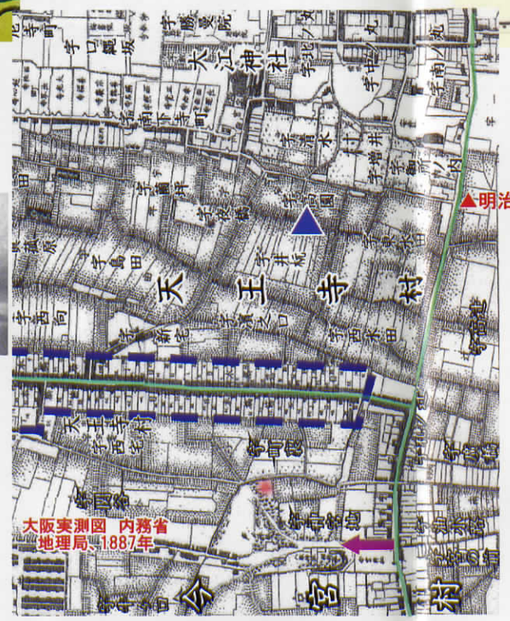
天保国絵図では、まず上町台地上の黒線が郡境であり、この配置では上が東成郡、下の城下町部分が西成郡となる。赤線は街道であるが、太い赤線は、紀州街道であり、大坂城下を貫いている。この街道の江戸時代における重要性が、釜ヶ崎の運命を決定づけたといえる。小字釜ヶ崎に紀州街道はたまたま走っていたのである。

今宮戎さんから、**廣田神社**を北に望む。←で、図示している。昭和初期に撮られた光景である。今宮村の村社の廣田神社の摂社の戎さんが、大坂町人の寄進で、独立して大きくなった。木津村の村社、敷津松之宮神社の摂社の大黒さんが大国神社として大きくなったのと同じである。さすが大坂町人に資金力による寄進の威力であろう。上田写真コレクションより



聖天山のふもと、鳥居下の、明治中期の写真である。現在でも街路にその雰囲気が残る。江戸期の絵図や明治の地形図で、地形的特色をつかむことができる。上田写真コレクションより

上町台地崖がよくわかる写真であり、各種絵図、地図で、視線を▲で提示している。もうひとつは**合邦辻**として、各種絵図、地図にその場所を▲で比定している。当時の雰囲気をつかんでもらえれば幸いである。明治初期撮影と思われる。上田写真コレクションより



左の大坂絵図は絵図の中でも情景描写にすぐれており、集落や田畑の在り処が、よく見て取れる

いずれの図にも**緑線**で、主要街道を色付けしている。

26:茶臼山南の林地と田畑が広がる_天王寺公園近辺 27:丸山_阿部野墓地の南 28:聖天山_同じ 29:天王寺村南部の上町台地の林地、田畑_天下茶屋の別荘地から邸宅街橋本町

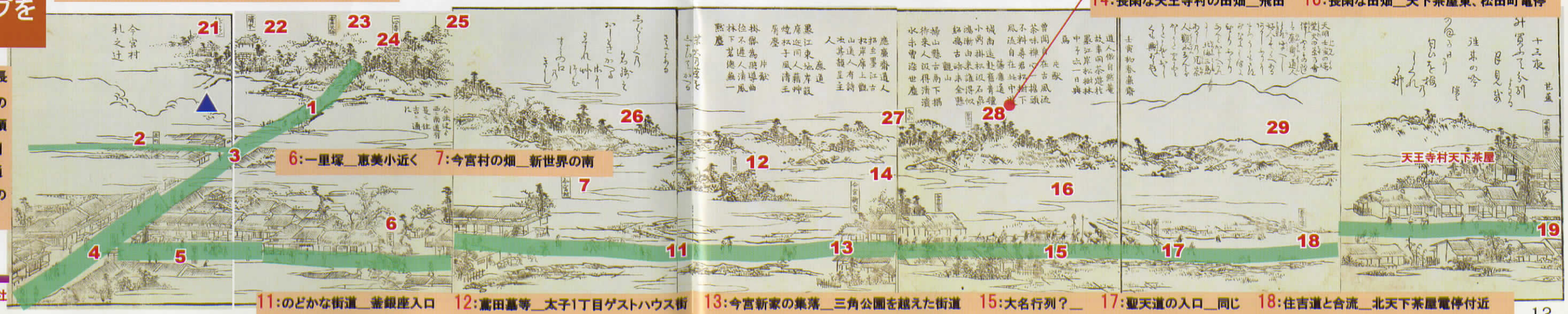
住吉名勝図会でタイムトリップを

21:勝曼院_同じ 22:清水寺_同じ 23:安井神社_同じ
24:一心寺_同じ 25:四天王寺_同じ

1:合邦辻_遍坂 2:長町_日本橋筋 3:長町の端(城下町末端)_恵美須町交差点 4:札場、紀州街道への曲がり角_普通の交差点 5:住吉街道の光景_恵美須町駅西側

6:一里塚_恵美小近く 7:今宮村の畑_新世界の南

14:長閑な天王寺村の田畑_飛田 16:長閑な田畑_天下茶屋東、松田町電停



戎道:今宮戎、広田神社

11:のどかな街道_釜銀座入口 12:富田墓等_太子1丁目ゲストハウス街 13:今宮新家の集落_三角公園を越えた街道 15:大名行列?_ 17:聖天道の入口_同じ 18:住吉道と合流_北天下茶屋電停付近

出典：『萩まちだより』20号（2019年）

「鳶田」の江戸期から明治初期までを学術的に掘り下げる

～近世大坂の都市施設の周縁部配置が生み出した歴史地理～

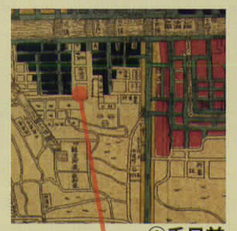
水内俊雄
大阪市立大学
都市研究プラザ教授

この新今宮駅南東地域の歴史を学ぶにあたっては、江戸期の鳶田という場所の系譜を正確に理解する必要があります。これは飛田新地のことではありません。その特徴は、江戸期の城下町の【身分別居住】と、【都市計画的な施設配置】に従っていることにあります。そこで、【賤視された身分階層の集住】が、城下町の【周縁部】にあるという地理的配置と、その場所の系譜をまず紹介します。

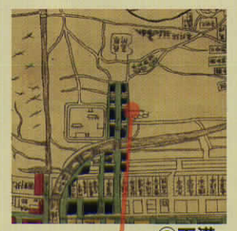
インバウンドやホテル資本等のラッシュでＪＲ天王寺～ＪＲ新今宮一帯は今や日本有数の注目エリア！この連載では当地の歴史をきちんと踏まえることこそが大事と考え、特集を続けてきました。その過程で、過去の日本社会で賤視された諸身分の理解がどうしても必要であり、江戸期から明治初期の変遷を一括して説明してもらうことになりました。正しくご理解ください。

吉村智博
大阪市立大学特別研究員
西成情報アーカイブ学芸員

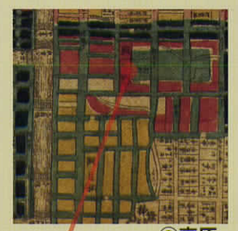
大坂図の作成・刊行は天保末期から盛んとなり、とくに、河内屋太助・伊丹屋善兵衛の手になる積典堂板は数多く出回り、色刷りの色彩も従来にない鮮やかさや美しさを備えていた。とくに天保初年にできた「天保山」は入港船の目印として、また大坂の新名所として人気を博したため、その部分は付け足り図形式で描かれている。本図の版元は、河内屋九兵衛・河内屋太助・河内屋政七・伊丹屋善兵衛。町屋は彩色がなく簡素であるが、掘割は水色、寺院は黄色、周辺村は緑色で彩色されている。かわた身分の渡辺村は「穢多村」と賤称で記されており、天満など四ヶ所は「長吏」とある。



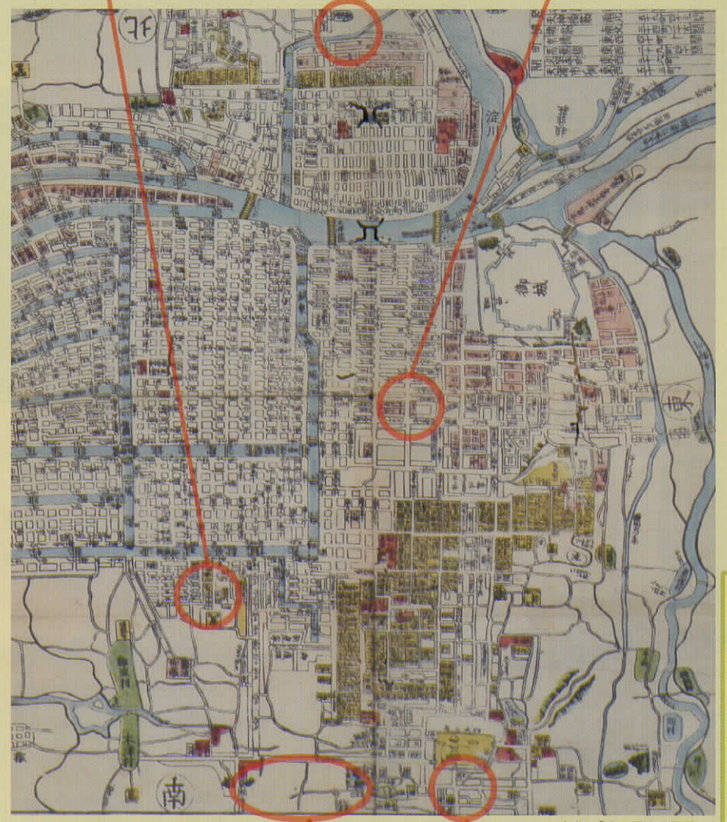
①千日前



②天満



③高原



出典：「改正摂津大坂図」弘化４（1847）年

④鳶田　⑤悲田院

周辺の５つの絵図は、「大阪市中地區甲名改正繪圖」（1872 年）から当該地域を切り出したものである。

＜明治維新をはさんだ「四ヵ所」の変化＞

1847年絵図と1872年絵図（大阪市中地區甲名改正繪圖、日文研所蔵）を用いて、城下町の終焉の地にあった「四ヵ所」の変化を見ることにする。（「四ヵ所」の説明は右下参照）

①千日前

敷地の形態はそのままに描かれており、六坊は記載は残っているが、刑場をはじめその他の記述はなくなっている。その後の跡地の再開発は、歓楽街千日前の呼称のようにミナミの中心地のひとつをつくりだした。

②天満

天神橋筋商店街となった亀岡街道から少々東に入ったところにあったが、家屋のみ記載されている。

③高原

「四ヵ所」の非人村(垣外)のトップである長吏が常駐して仲間仕法に基づく協議をおこなった高原会所には、運営機能ともにに、軽犯罪をおかした罪人を収容して労働力とする溜(ため)も併設されていた。刊行町絵図には「タカハラ」「タカハラタメ」などと記されてきたが、身分制の解体とともにそうした賤称は抹消された。

④鳶田

天守閣所蔵の絵図に見られる非人村と隠坊（下図を参照）は、1872年の明治絵図では、前者は建物のみが残り、ただ刑場の記述は残っている。周辺の状況、特に今宮村と紀州街道（住吉街道）は、一里塚、広田神社（ヒロタ神社）、今宮戎（戎宮）とともに、鮮明に読み取れる。また合邦辻、一心寺、そして上町台地の崖地も見て取れる。

⑤悲田院

四天王寺の西門から現代の谷町筋の参詣道沿い南に下ったところで、家屋のみの記載となっている。近隣には現存する施行院が描かれている。茶臼山もきれいに描かれている。天王寺駅の住所地名は悲田院町である。

鳶田墓所に居住する非人村と隠坊
＜両方とも約 150 年前に消滅した（上述）＞
出典：大阪城天守閣所蔵、「天王寺附地鳶田墓所之図」元禄３（1690）年

＜被差別民※と城下町＞

※被差別民とは、差別問題が意識されるようになってから登場した表現であり、江戸期では賤視された身分となるが、ここでは被差別民とする。

江戸時代の大都市には、武家町、寺町、町人町と接続する周縁部に多くの被差別民が居住していた。江戸(東京)、京(京都)、上方(大坂)などには共通して、「皮多」「長吏」「三昧聖」などが集落を形成し、都市機能の重要な部分を担っていた。為政者は彼らをそれぞれ「穢多」「非人」「隠亡」などの蔑称(賤称)で呼んでいたが、当の被差別民たちは自身のことを、「皮多百姓」(身分はあくまで百姓であるという意味)、「長吏」(吏、つまり実務的な能力に長けている身分という意味)、「三昧聖」(葬儀の執行や墓所の管理などを専門＝三昧におこなう聖なる身分という意味)と称していた。

ここで、豊臣秀吉の天正の町割(地割)にはじまって、徐々に大都市の姿を整えた上方(大坂)に話をしぼろう。

身分	名称	所在地	成立	由緒・来歴・職制など	近代(明治～大正期)
皮多	渡辺村(摂津役人村)	西成郡木津村	元禄14(1701)年	元和5～7(1619～21)年下難波村領移転後、木津村領へ移転	渡辺村領域を北・東・南に拡張し、西浜町と改称(皮革業隆盛)
(穢多)	外島	西成郡光立寺村	(不詳)		1910年の新淀川敷設にともなって水没、3カ所へ移転
長吏	悲田院	東成郡天王寺村	文録3(1594)年	中世から施薬院とともに四天王寺支配	(落札後？)、住宅地　※施薬院は現存
(非人村・非人小屋)	鳶田	西成郡今宮村	慶長14(1609)年	天王寺預け非人の収容(悲田院の「出垣外」)	(落札後？)、電光舎⇒住宅街
「四ヵ所」	道頓堀	西成郡難波村	元和8(1622)年	元和8(1622)年～西(旧)垣外、天和4(1684)年～東(新)西垣外	(落札後？)、興行地(「楽天地」など)
	天満	西成郡川崎村	寛永3(1626)年	天満与力・同心の北隣	1872年に落札後、天満紡績周辺飲食街
	高原会所	三郷(南組)	寛文年間(1661～73)	高原溜(人足寄場)を1733年併設し軽犯罪人の収容(瓦土採掘？)	(落札後？)、学校用地
三昧聖	鳶田	西成郡今宮村	いずれも僧・行基によって８世紀に開基されたと伝承	正善坊	1873年に阿倍野墓所へ統合後、住宅街
(墓所・隠亡)	千日	西成郡難波村		六つの坊舎(東・西・南・北・中・隅)	1873年に阿倍野墓所へ統合後、興行地(「芦辺劇場」など)
「七墓」	小橋	東成郡東高津村		東之坊	1873年に阿倍野墓所へ統合後、市営公園
	蒲生	東成郡野田村		※三昧聖は存在せず	＜現存＞
	葭原	西成郡川崎村		東之坊、西之坊	1873年に長柄墓所へ統合後、一部が北市民館（1921）
	浜	西成郡南浜村		東之坊、西之坊	＜現存＞　※1891年に大阪市へ移管
	梅田	西成郡曽根崎村		奥之坊	1873年に長柄墓所へ統合後、省線貨物ターミナル
＜刑場＞	鳶田	西成郡今宮村	(いずれも不詳)	(鋸挽・磔)・火罪	1870年に廃止後、木賃宿街(紀州街道沿い)
(死体取捨や下級行刑役は、長吏・皮多身分が役負担として執行)	道頓堀	西成郡難波村		獄門刑(晒首の刑)※晒場は、七高札場のうち、日本橋と高麗橋	1870年に廃止後、興行地
	野江	東成郡野江村		鋸挽・磔・(火罪)	1870年に廃止後、住宅地(京街道沿い)
	木津川口	西成郡難波島(月正島)		牢死・死罪・相対死の際の死体の捨て置き(渡辺村の役負担)	1870年に廃止後、工場街
	安治川口	西成郡唐網島			1870年に廃止後、工場街
＜屠場＞			1910(明治43)年		木津川屠場～1939年市営
(近代以降)			1925(大正14)年	旧木津村七反島屠牛場⇒大阪屠畜(今宮村)、浪速屠畜(天王寺村)を1909年に統合⇒1909年に今宮村営(⇒町営)屠場	今宮屠場～1939年市営

出典：各種資料をもとに作成（不確かな情報も多く、現時点での暫定的見解であることに留意いただきたい。）

皮多身分について

まずは、皮多身分であるが、西成郡木津村に居住していた渡辺村と同郡光立寺村の外島村とが存在した。このうち外島村についてはほとんど何もわからないので触れない。渡辺村は、上町台地の北端に位置した渡辺津や中世の武士団渡辺党にその名の由来があり、多くの役目を命じられていた。刑場での仕置(磔や火罪の際の手伝い)、市中引回しや下手人の護送、刑場の準備や後片づけなど、掃除(城の堀や牢屋など)、火事の際の火消人足などである。このため、渡辺村は自称として「摂津役人村」を多用している。また、渡辺村は、太鼓張替の役目も命じられていて、大坂城の時櫓(時太鼓)や四天王寺の聖霊会(火焔太鼓)などは、すべて渡辺村で作られた。太鼓屋のなかには、遠く薩摩藩知覧郷とも取引を行い、「骨粉」をつくるのに際して重要な材料となる牛骨を提供していた業者もいた。

三昧聖身分と墓所について

次に三昧聖身分であるが、彼らはそれぞれ墓所の一角に坊舎を構えて生活していた。墓所は、千日前(難波村)、鳶田(今宮村)、小橋(東高津村)、蒲生(蒲生村)、葭原(長柄村)、浜(南浜村)、梅田(曽根崎村)にそれぞれ村領として位置づけられているが、いずれも8世紀に僧行基によって建立されたと伝承されている。7カ所の墓所は「七墓」と総称され、すべてに「火屋」(火葬場)が併設されていた(蒲生にだけは「三昧聖」がいなかった)。人の死は避けて通れないが、遺体の搬送、僧侶の手配、火葬の場合の諸事万端、さらに墓地の管理までをも三昧聖が一手に引き受けていた。

長吏身分と居住地「四ヵ所」について

次に、長吏身分であるが、彼らは小屋(垣外)を構え、悲田院・飛田・道頓堀・天満に居住していた。それらは総称して「四ヵ所」と呼ばれており、長吏一人を筆頭に、小頭五人がおかれていた。彼らが垣外仲間の指導や運営をおこない、個別の垣外を超える問題は「高原会所」で協議していた。垣外の一般の構成員を若キ者とよび、その下には彼らが抱える弟子が大勢いた。「御用」と称される役目としては、犯罪人の逮捕や監察、垣内番、刑場での使役、罪人の預り、牢番、乞食・野非人の取締り等などであり、市中からの定期的な施物や駄賃などを主な収入源としていた。四ヵ所のなかで、もっとも歴史が古いのは、悲田院垣外で、東成郡天王寺村に属していた。中世から四天王寺と関係が深く、1594(文禄3)年に四天王寺の南西に移転したと記されている。その次は、鳶田垣外で西成郡今宮村の所属であった。1609(慶長14)年に転びキリシタンの「乞食」を大坂奉行所が詮議し、天王寺村へあずけたが、今宮村内に垣外を設置することになった。三番目は、道頓堀垣外で、西成郡下難波村(のち難波村)にあった。1622(元和1)年に、墓地(三昧聖)や刑場、旦那寺となる竹林寺などに隣接する場所に設置された。そして、最も北に位置する天満垣外。西成郡川崎村にあり、1626(寛永3)年に天満組の北東側(同心・与力らの居住地の北東)に置かれた。

近世から近代期に入り

このように、被差別民は都市機能の重要な部分を支えていたのであり、徳川時代(江戸時代)の巨大都市は、彼らの役目や技術なくしては成り立たなかったといっても過言ではない。その歴史を知ることは、きわめて重要なことである。ここでは鳶田にも関連して、「四ヵ所」の明治維新以降の変化について追加で説明しよう。左の1872(明治5)年の絵図も参考に読みすすめていただきたい。

こうした身分制度は1871(明治4)年8月の「賤民廃止令」(「解放令」)によって廃止される。その後、こうした身分の人々やその居住地はどうなったのであろうか。

皮多身分は、「旧賤民」や「新平民」などを記されるようになったが、居住地はそのまま継承され、皮革(関連)産業なども進展し、被差別部落としての歴史をあゆむ。ただし、外島村は、1910(明治43)年からの新淀川敷設工事にともなって水没したため、近隣の3カ所に分散するが、移転先はいずれも江戸時代に起源をもつ被差別部落として社会に認識されていく。

長吏身分は、一部が明治維新の際に混乱を鎮圧するための「邏卒」(巡査クラス)として採用されるが、官僚的な警察制度が整うとともに組織から排除されていくことになる。長吏頭については後の記録から「御茶屋」(花街)の主人となったなどの消息がわかるものの、居住地の垣外は落札などに供され、住宅地になった場合もあれば、商業地や興行地へと様変わりしていく。鳶田の場合は、やがて隣寸工場・電光舎が操業し、その周囲に労働下宿や安宿が立ち並ぶようになり、やがて木賃宿街としての性格も併せもっていった。

三昧聖の居住した墓所は、1873(明治6)年に阿倍野、長柄、岩崎新田の3カ所に新設された巨大墓地に統合され(ただし、浜墓所と蒲生墓所は現存)、跡地は、二束三文で引き取られていた。このうち、千日と梅田、葭原はいずれも、近代都市の興行地として発展していき、ミナミ・キタの代名詞となっていく。鳶田は長吏の居住していた垣外村を含めて、労働者向け住宅街となり、西部のほうは木賃宿街へと変化していく。

現在の大都市大阪の姿は、こうした歴史的な変遷に大きく由来しているのである。

新今宮駅周辺　もう一つの磁力

山王・太子地域の江戸時代から大空襲まで

（飛田新地含む）

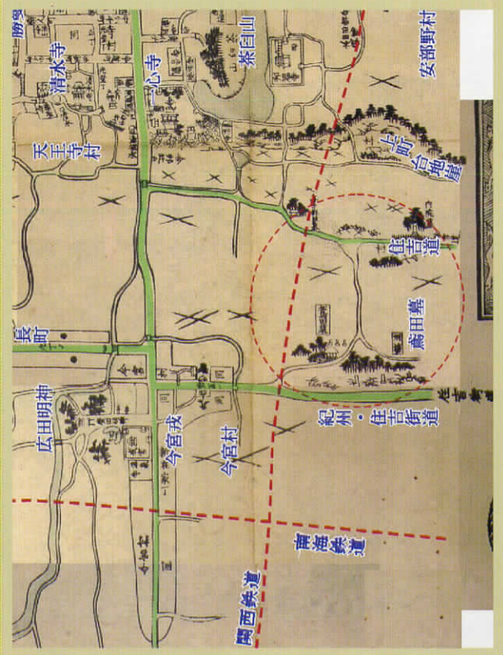
出典：『萩まちだより』19号（2018年）

展示パネルからの転載です。さらにくわしく、読みやすい現物を西成情報アーカイブで見れます。

鳶田と飛田は異なることもわかるっピ～

水内俊雄
大阪市立大学
都市研究プラザ教授

吉村智博
大阪市立大学特別研究員
西成情報アーカイブ学芸員



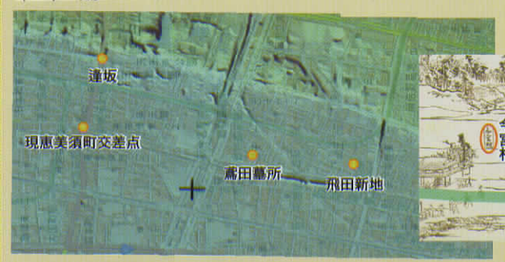
①描写力豊かな絵図から紀州街道、飛田を観る

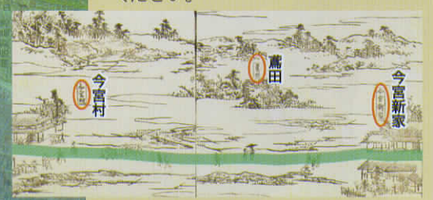
1806 年に刊行されたこの大坂絵図では、絵図の南縁に私たちが見たい城下町の周辺部が克明に描かれています。主要街道を薄い緑色で示しましたが、歴史的に重要な街道が南北と東西に走っていることがわかります。南北は、日本橋筋からと四天王寺からの 2 本の住吉街道があり、日本橋筋からのほうは紀州街道とも呼ばれていました。そして東西のほうは、四天王寺から木津、そして茅渟海（ちぬのうみ、大阪湾）を結んでおり、現在でも国道 25 号線として踏襲されています。その交差点がいまの恵美須町、当時の今宮村にあたります。鉄道も赤点線で補筆していますが、東西と南北の重要性は鉄道に引き継がれました。また上の明治初期の地形図と比べて、鳶田の江戸期の空間セッティングが墓所を除いてほぼなくなり、明治期にゼロからの出発となったこともよく見て取れます。

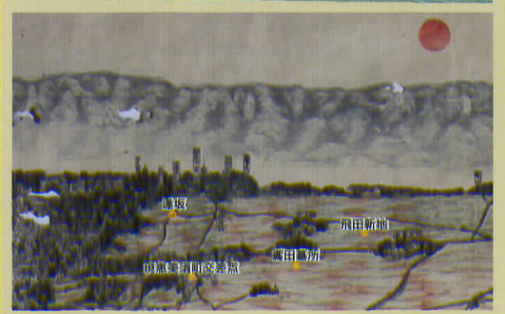
（出典：増脩改正攝州大阪地圖、1806 年、国立国会図書館デジタルコレクション）

②上町台地下に広がる低地では？

左下に配置した鳥瞰図である鳥瞰図である「大湊一覧」（1839 年）では、上町台地の手前が実によく書き込まれている。明治期には白地のキャンパスと表現してよいが、飛田周辺では街道とそこに珠状につらなる集落の存在と刑場が、この土地の江戸時代系譜を見事に示しているといえます。明治初期の地形図で刑場は墓所のみに縮減している状況が見て取れます。土地の起伏を標高レリーフより確認してください。







上図の住吉名勝図会にて旅人気分で紀州街道を歩くと、今宮村を抜け、左手に飛田墓所を見ながら、田園風景を愛で、今宮新家に至ります。

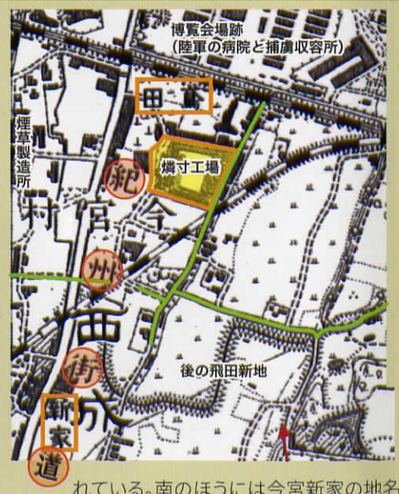
（出典：大阪近傍図、1898 年、大日本帝国陸地測量部、地理院地図（電子国土 web）の陰影起伏地図などを利用、『大湊一覧』（神戸市博物館所蔵、天保 10（1839）年）、住吉名勝図会（岡田玉山画 1795 年）www.geocities.jp/wdc558/sumi/zue/list-zue.htm より）

⑤天王寺村の詳細地図より、「阪南郊外」の飛田方面を見る

大変ミクロな地図で詳細に町名が描かれている。東側の耕地整理が行われた地域では、北から東西に北玉水通りから阪堺電車平野線の走る緑町まで、南北に北門筋などの町名が新たに付されている。商店街の通り名は、北天神筋とあり、当地の鎮守の天神の森から北に、ということで名づけたのであろうか。また燐寸工場跡は、住宅地として跡地利用されているが、その町名が、電光町とあるのは大変印象的である。

（出典：阪南郊外精図、1921 年、大阪市立図書館）

なるほど。木賃宿街はここで初めて登場するのカァ～



④後の飛田新地から北側、上街台地の崖下

上写真に見られる飛田新地指定の杭は今の斎場前の道路と新地の東南角あたりから、北側を見通している。畑であることがわかります。右側に旭通りとして天王寺駅方面につづく谷筋が見え、左後方には燐寸工場の煙突が見えているのであろうか。地図では黄色囲いをしている。緑の街路は現在のアーケード商店街であり、地名は鳶田がもとの刑場、その後墓場として残っている（墓地記号あり）エリアに付されている。南のほうには今宮新家の地名が書かれている。釜ヶ崎の木賃宿街は、鳶田の地名の田のほうに街道沿いの見ることができる。木賃宿街の登場時がわかる数少ない地図である。

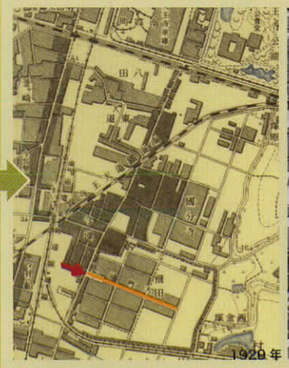
（出典：2 万分の 1 地形図「大阪東南部」、写真は 1905 年撮影、加藤政洋氏蔵）

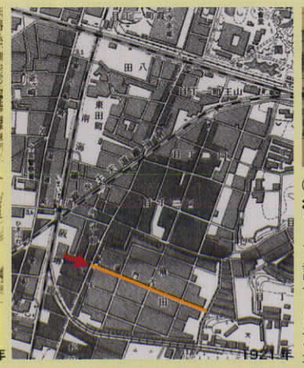
③明治末期の地籍図、多くの小字名が！

明治末期の大阪市とその接続町村の町名及び小字名が地図化されている。鉄道北側は大阪市となり新町名がつけられ、旧来の小字名は消えている。1パネルで述べたように、住吉街道と鉄道の交差ポイントがたまたま小字釜ヶ崎であったことで、その後の小字名の運命を決しました。今池や花園、海道などの小字名が見られるとともに、多くの地名はその後の市街地化で、今宮村域は 1922 年に新町名化される。飛田新地の敷地は天王寺村に属し、小字名、堺田、稲谷となっている。

（出典：吉江集画堂地籍地図編集部編『大阪地籍全三編』吉江集画堂、1911 年所収掲載図に加筆。町丁、小字界は原本の刷りが不完全で、左に少しずれて印刷されている。）

小字釜ヶ崎という地名も見える





⑥飛田新地の成熟と、周辺市街地の密集化

大門通りを西の入口から見た写真であり、地図上では、開設数年後の徐々に店が埋まっていく様子と、昭和にはいってほぼ楼閣で埋め尽くされた状況が見て取れる。釜ヶ崎の地名は両地図とも記されているが、昭和の地図では、釜ヶ崎や八田という小字名が一部残りつつ、新町名が書かれている。飛田の墓所は消えている。

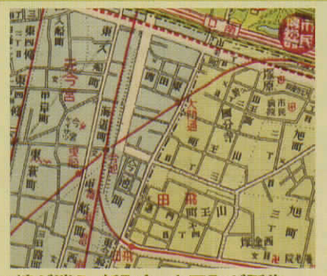
（出典：1 万分の 1 地形図「大阪南部」　右が 1921 年、左が 1929 年）

釜ヶ崎の地名が消えた

⑦大大阪の誕生と、西成区、住吉区の登場

1925 年大大阪の成立とともに、市販図は大和川まで南は大きく広がった。新区の境界は太赤線で、左上隅が浪速区、右上隅は天王寺区、右側の飛田方面は新設住吉区となった。左側の新設西成区で釜ヶ崎は依然書き込まれているが、入船とか太子方面の東田などの新町名が登場している。住吉区側になる今の山王方面（旧天王寺村）はまだ新町名は導入されておらず、住吉区天王寺町を冠して、国分寺（小字名）と飛田の地名が書かれている。

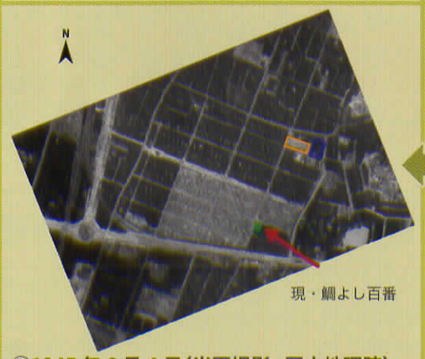
（出典：大阪市大地圖、1925 年、和楽路屋）



⑧釜ヶ崎が消え、新町名、山王町が誕生

左側の新西成区側では釜ヶ崎が消え、新町名が書き込まれている。元今宮という汎称名が登場する。燐寸工場や煙草製造所は消えている。1929 年に住吉区側で新町名が導入され、ここで天王寺町という冠が取れ、山王 1 丁目から 4 丁目の地名が登場する。上町台地側の旭町もここで登場する。汎称地名の飛田、元今宮は依然書き込まれている。

（出典：最新大大阪市街地図、1935 年、和楽路屋）



⑩1945 年 6 月 4 日（米軍撮影、国土地理院）

大阪市では 3 月 14 日の空襲で、飛田も南部分が全焼する。延焼を防ぐための消火活動が行われたときく。その効もあって登録有形文化財となっている現在の鯛よし百番は焼失をまぬかれた。

⑨1945 年 2 月 6 日（米軍撮影、国土地理院）

左写真をあわせ、米軍の空襲偵察写真である。3 月大空襲の 1 ヶ月前であり、空襲という悲劇が 1 ヶ月後に待ち受けていた。

北部分と鯛よし百番は空襲での焼失をまぬがれたわけなのね

出典：『萩まちだより』21号（2019年）

～太子1丁目には歴史地理の宝が埋まっている～

20世紀初頭の職工住宅（120戸規模？電光舎燐寸（マッチ）工場）の謎に迫る

全国に先駆けた労働者住宅だったのカァ～

ほんまにいろいろな歴史がつまってますわ、この一帯

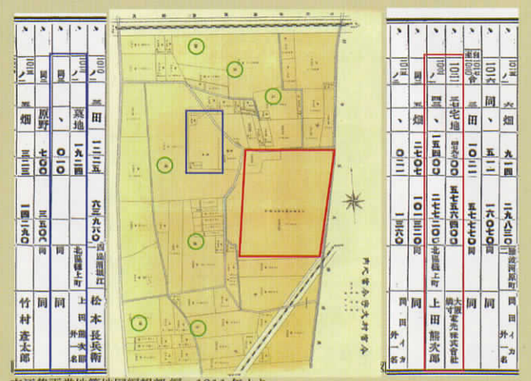
水内俊雄
大阪市立大学
都市研究プラザ教授

吉村智博
大阪市立大学特別研究員
西成情報アーカイブ学芸員

職工事情　～燐寸工場とその周辺の労働者長屋

釜ヶ崎近辺の最初の市街地化は、現太子 1 丁目あたりで始まった

電光舎の燐寸工場は今の太子 1 丁目、当時の今宮村小字東道 1022 番地（土地台帳ではそうなっているが地籍図では 1021 番地）に、1897 年に登場した。4,797 坪と登記されており、赤枠で示しているように 120m四方の結構広い敷地を有していた。鳶田墓地は青枠で示しているが、北区樋上町在住の上田熊次郎所有となっている。近隣のいくつかの敷地をこの上田が所蔵している。緑丸は小字名で、上から八反田、東道、今池であり、最初の 2 つは 1922 年の町名の新設で、二つの文字を合わせて東田町、今池はそのまま今池町、この地籍図にはないが、西隣の釜ヶ崎は東入船町となった。



吉江集画堂地籍地図編輯部 編、1911 年より

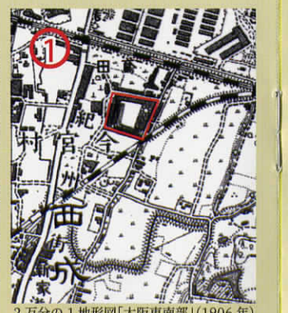
地図にみる電光舎近隣の変遷

①地籍図が 1911 年より少し前の状況であると思われるが、この①の 2 万分の 1 地形図は 1908 年であり、ほぼ同時期の市街地化の状況を示している。工場と墓地の配置は地地籍図と同じであり、長屋は工場の周りにあるとするとまだ密集している状況とは言えない。紀州街道沿いに木賃宿の進出はすでに描かれているようであるが、1903 年刊行の職工事情で描かれた長屋がどこと特定するのは、この①地図からはむつかしい。

②手元にある市販地図で最初に燐寸工場が記されるのは、1911 年刊行の②の地図であり、ここで今宮新家という地名が、工場の北側に付される。まさしく職工事情でいわれた今宮新家であり、この位置関係からすると、長屋は工場の北となる。

③1917 年の地図になると、鳶田という地名が工場の北側に付される。職工事情で言われた今宮鳶田であろうか。この②、③から少なくとも職工事情で描かれた今宮の長屋は、現在の太子 1 丁目にあたることになる。

④工場がなくなったあと、一般宅地化された状況が、1928 年撮影の④の空中写真となる。今はなき電光社稲荷も登場しているはずである。堺筋の都市計画道路予定地がこの写真には描きこまれており、赤線でそれを示した。



2 万分の 1 地形図「大阪東南部」（1906 年）

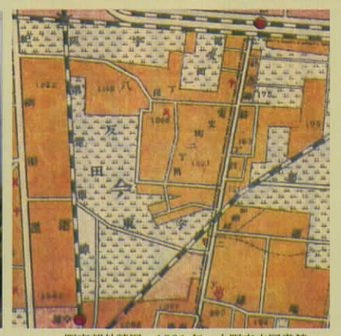
實地踏測大阪市街全圖、1911 年、和楽路屋

實地踏測大阪市街全圖、1917 年、和楽路屋

大阪市空中写真（1928 年）

1921 年の阪南郊外精図では、燐寸工場が描かれておらず、かつて今宮新家と記されたところが、電光町一丁目、そして工場跡は、二丁目と書かれている。この町名の位置関係からすると、職工事情の長屋は、北側の一丁目になる。いずれにしても現在の太子 1 丁目であることには違いない。今の商店街の通りが、「北天神筋」書かれており、天 神の森さんにつながる道であることを言っているのか、この道には郡境界がひかれており、これより東側は東成郡天王寺村で村社は、天神の森である天神さん、西側は西成郡今宮村で、村社は広田神社である。

電光社稲荷内にあった石碑



阪南郊外精図、1921 年、大阪市立図書館

日本初の社会ルポルタージュ『職工事情』がとらえた燐寸工場長屋世帯

1903 年に農商務省商工局から刊行、工場法制定につながる実地調査で、「燐寸工場事情」（右文がその一部）では、下表のように今宮村飛田や今宮新家に居住する 11 世帯についてもその生活実態がやや詳細に記録されている。世帯主である男性の職業を見ると「人夫」「掃除」「小遣」「手伝」など下働き的なものが多く、平均日給も 15 ～ 30 銭とばらつきが大きくかなりの低額である。一方、燐寸工場の「職工」として働いているのは同居する家族、しかも若年の子どもが中心であり、とくに就学期の子どもは学校を退学して、「職工」となっているようである。なお赤字は燐寸工場で働いている事例です。同じ燐寸工場の職工事情として、神戸の 4 地区から 11 世帯の生活事情の紹介が続いています。

職工事情で紹介された今宮地域の長屋居住世帯の生活事情

居住地	年齢	生国	職業	平均日給	家族
今宮新家	52	大和国磯城郡多村	羅宇職	15銭	妻46歳・長男25歳・長女19歳、<全員生国住まいにつき送金>
今宮新家	48	和泉国境市湊村	下水掃除	25銭	妻38歳(内職)・長男11歳(未就学)・長女7歳・次女2歳
今宮村鳶田	42	和泉国	警察小遣	23銭	長男11歳(学校退学後、燐寸工場職工・日給9銭)・長女6歳
今宮村鳶田	24	和泉国泉南郡元島村	手伝土方	20～25銭	妻23歳(内職)・子供4歳・老母66歳(子守)・実弟２人17歳・12歳
今宮村鳶田	58	和泉国泉南郡樫井村	無職(病気)	(不足)	妻57歳(病気)・長女22歳(元燐寸職工・内職・日稼8銭)・長男17歳・次男8歳
今宮村鳶田	23	紀伊国名草郡元久住村	落下石炭拾	30～40銭	妻24歳(内職・日稼7～8銭)・子供3歳
今宮村鳶田	49	近江国神崎郡五ヶ村	団子細工	30銭	妻42歳(棄児預り・儲月3円)・長女15歳(燐寸工場職工・日給12～13銭)・長男12歳(同・7銭)
今宮村鳶田	26	京都	木魚製造	30銭	母51歳・実弟23歳(燐寸工場職工・日給25銭)・実弟19歳(同・20銭)・実弟16歳(同・12銭)・実弟14歳(同・8銭)
今宮村鳶田	40	大和国郡山	手伝	35銭	妻39歳(内職・病気)・長女18歳(燐寸工場職工・日給7～10銭)・長男13歳(退学後、同・8銭)・次男4歳・三男3歳
今宮村鳶田	46	(不詳)	下水掃除	25銭	妻46(内職・日稼5～6銭)・長女17歳(燐寸工場職工・日給13～14銭)・長男14歳(同・8銭)・次男11歳(同・6銭)・次女7歳・三男5歳
今宮村鳶田	45	大阪市南区瓦町	衛生掃除	28銭	妻39歳(病気)・長女18歳(善哉屋勤・月3円)・長男15歳(燐寸工場職工・日給8銭)・次女10歳・三女3歳

ヲ取八裏四此一レル
今綯リ男長錢部貫今ヲ大
大フ女子屋位落目宮以阪
阪等子ハノ宛ノノ村テノ
神種ハ下如ノ長價近今名
戸々燐水キ日屋金傍日護
ニノ寸掃八拂八十ニハ町
於内ノ除略ト概貳移普ハ
ケ職工人ホスネ錢レ通古
ルヲ場夫前此間ナリノ來
貧爲ニ、記部口リ此民有
民ス通人ト落ニ一邊家名
部モヒカ同ノ間貫ニトノ
落ノ又車格家奥目ハナ貧
ニアハ夫ノ賃行ハ陸レ民
ツリ自、家ハニ一軍リ部
キ調宅手ニ比間升兵而落
査ニ傳テ較半ニ營シナ
シタ土一的ナ三ノテリ
ルリ方日低リ合殘從シ
モテ等八廉其位飯來カ
ノヲ燐ニ錢ニ家ニヲ之同
例寸シ乃シ賃當賣ニ府
示小テ至テハレリ住ノ
セ箱一拾大一リ拂シ建
ヲヲ日錢阪ヶ其フタ築
製大位市月中ノル規
スル抵ナ內壹一店貧則
ル參リニ圓升ア民ニ
モ四今テ貳ハリハ依
ノ拾宮モ拾米殘町リ
多錢邊日錢二飯端總
ク內ノ本內三ハレテ
其外住橋外合麥ニ改
他ノ民筋二ハ飯驅築
棕賃ノ附テ麥ニ逐サ
梠錢生近一ナシセレ
繩ヲ業ノ日リテラタ

電光社裏長屋の實景説明（救済研究 7-7 より抜粋）

大阪南部の飛田、釜ヶ崎等の貧民窟には、三四十軒の木賃宿に四千餘名、電光社、八百市裏等の澤山な裏長屋に壱萬五六千の細民が住んで居る。是等細民の指導並みに住宅の改善の為に、新設の今宮署では特に小寺警部署を部落改善係に任命して着々仕事を進めて居るが、其内でも風紀、衛生等から見て捨て置き難いものは、家主と協同して改築の為に取り毀しめて居る。

表面の電光社裏長屋も其一つであって、本は飛田遊郭の北に在る電光社燐寸製造工場の職人長屋であった。而して其戸数は百廿戸で住民は八百人程の内、目下大方は退轉して尚ほ行先のない者二百人餘りが住居して居る。

救済研究 7-7　1918 年　大阪市外今宮釜ヶ崎電光社裏長屋と其残骸

移轉して了った長屋は床板を剥いて再び住むことの能きないやうにしてあるが其内部に立入って見ると實に惨憺たるもので、よく今迄人が住んで居ったと思われる。周圍が高くなった為に、一体に窪地である所が餘計に低くなり、溜り水の上に浮き御堂の如く建って居る。そして空き家の多くは、残留の住民が羽目板床板などを片端から引きめくって竈の下へ拋り込んで了ふから、宛然蟲籠の如き残骸を風雨に曝して居る。

寫眞は記念の為に五月末警務課寫眞班の手で撮影して居いたものである。

掘り起こしならまかしとき♪

百六軒に店立て　今宮の電光長屋　十二円の涙金で立退いたもの僅かに二戸のみ　五百の貧民途方に暮る

府下西成郡今宮町燐寸製造会社電光舎は同町地上に百六戸の棟割長屋を有し一日一戸十銭の家賃にて細民に貸し来れるがその筋にては将来の発展上家主に対し衛生上有害なると建築条例に違反せる廉を以て改築を促し家主は又その筋の意を受けて昨年七月頃より店子に向い本年二月限り家明け渡しを申渡せるも貸家払底の折柄とて延び延びになり四月となりても立退くもの一人もなかりしに去る十七日の夕方住吉署の巡査二十余名が百六戸の店子を附近の事業館に招集し「二月限りの期限が過ぎても家明けを実行せざるは不都合なり、一日も早く立退くべし」と諭し電光社の加納支配人も亦店子一同に対し「五月十五日迄に立ち退く時は一戸当り十二円宛の涙金を贈るも同日迄に家明けを実行せざる時は遠慮なく家屋の取り毀ちをなすべし」と申し渡したるも三十日迄に件の涙金にて立退きしもの僅に二戸にて百四戸は何処へ行っても住む家がないとて動かず、事実またこの長屋に住める五百余名の細民を一度に立ち退かすとも彼等の住むに適せる貸家がない事とて店子等も途方に暮れ居れるが岩間方面委員其他の篤志家は其の解決につき府救済課其他に交渉中なり（大阪毎日新聞 1919.5.3（大正 8））

出典：神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫「住居問題」（1-085）

こつぜんと消えた？電光舎と電光舎長屋！

電光舎長屋には 1918 年 7 月時点で、元職工のうち 200 人あまりが住んでおり、その戸数は 106 軒であった。このうち、電光舎側の立退交渉に応じたのはわずか 2 軒だけであった（居住人数の記述には記事によってかなりの差あり）。

電光舎自体は、黄燐マッチの製造・輸出が 1922 年に国際的に禁止されたことと、第 1 次世界大戦の休戦反動で業界全体が不況となったことで、同年中に数社との合併計画の対象となるが、これは頓挫したようである。

その後ほどなくして廃業し、釜ヶ崎から姿を消したとみられる。翌 23 年の記録には、大阪、名古屋の黄燐マッチ工場が「全滅」したとある。（以上の経緯は、日本マッチ工業会の公式 HP および大和産業㈱ HP「マッ チの歴史」に詳しい）。

1918年7月1日	『救済研究』7 月号に長屋の写真と「残骸」と称した写真が掲載 ※説明文にはもと 120 戸・住民 800 人のうち 200 人余り居住 ※大阪の社会事業としては米騒動以後の地域改善事業との位置づけ
1919年5月3日	『大阪毎日新聞』に「百六軒に店立て／今宮の電光長屋／十二円の涙金で立退いたもの僅かに二戸のみ／五百の貧民途方に暮る」掲載 ※前年 18 年 7 月ごろから立退勧告をおこなっていること
1922年3月25日	『大阪毎日新聞』に「有力マッチ会社の合同計画」掲載 ※神戸の四大会社のうち 3 社、大阪の 2 社、その他と大合併計画 ※本年 6 月末で黄燐マッチの製造・輸出禁止（国際労働会議決議）